

複言語複文化環境で育つ子どもの「学び」を育む支援環境構築に関する研究

米澤千昌（大阪大学大学院 博士後期課程）

1. 研究の背景と本研究の目的

複言語複文化環境で育つ子ども（以下、複言語・複文化の子ども）への支援では、学校での学び全体を育むことの重要性が指摘されており、日本語初期指導だけでなく、教科学習につながる学習言語の習得、母語・継承語の保持・伸長、在籍学級との連携による実践等の研究が増加している。しかし実際の教育現場では、支援が行われていない、支援は初期指導のみというケースも多く、研究成果をいかに現場に繋ぐかが課題として挙げられる。また昨今、学びは他者とのやりとりの中で生まれるものだという学習観が広まってきているが、この分野の研究の多くは言語習得に主眼が置かれている。複言語・複文化の子どもの学びの育成には、言語習得だけでなく、在籍学級での他の児童とのやりとりまで視野にいたした研究も必要だと考える。本研究では、研究成果を現場へとつなげ、複言語・複文化の子どもの「学び」を育むよりよい支援環境の構築を目指してアクション・リサーチを行った。複言語・複文化主義の理念を基盤とし、コミュニケーションのために複数の言語を用いて異文化間の交流に参加できる複言語・複文化能力の育成を目指した実践を行うことで、複言語・複文化の子どもの支援における課題解決の糸口を探り、複言語・複文化の子どもの「学び」を育むよりよい支援のあり方を探った。

2. 実践概要と分析方法

大阪府公立 H 小学校では、週に 1 回放課後に日本語支援教室が開かれ、報告者はそこに通う複言語・複文化の子ども 0 と J の支援に携わっている。2 名とも母親か父親が日本人の国際結婚家庭に生まれた子どもで、本研究の実践当時小学 4 年生であった。本研究では先行研究や 2017 年度の実践結果を基に、①在籍学級での活動の先行学習として、日本語支援教室でプロジェクトをベースとした活動を行い、その過程で子どもたちが伝えたいことを自分で、日本語で表現できるように支援する、②活動の中で複数の言語や文化を扱い、複言語・複文化能力の成長を促す、③在籍学級と連携し、在籍学級で全児童が言語や文化の多様性を認め合えるような活動を取り入れる、の 3 点を軸に 2018 年 4 月から 1 年間実践を行った。実践時の様子はフィールドノーツに記録した。分析は、エスノグラフィの手法を用いて支援環境の分析を行い、その支援下での子どもの変化を、アセスメント結果や活動中の発話データ、子ども、教師、保護者へのインタビュー結果を基に探った。

3. 分析結果

報告者と担任との間で支援の目的が一致したことで、在籍学級との連携による支援が始まった。連携が始まり、担任と報告者とのやりとりは増え、日本語支援教室では先行学習が行われたが、在籍学級での多様性を認め合う活動の実践には至らなかった。在籍学級での時間確保の難しさ、支援全体の目的や理念に関する話し合いの不足、環境の変化に対応できる柔軟性の不足が要因であったと推察される。しかし、子どもたちには成長が見られた。日本語支援教室での先行学習では、子どもの知識や経験を活かしたり、IT や保護者を情報リソースとして活用したり、学外から複言語話者を呼んで交流の場を設けたりすることで、日本語で表現することを中心とした活動の中でも複数の言語や文化を取り入れることができていた。その活動の中で、2017 年度は自身のルーツのある国について話すことがほとんどであった 0 と J は、自身のルーツへの誇りだけでなく、他の言語や文化にも興味を示し、グローバルな視点で活動テーマについて考えたり、国同士を比較したり、様々なリソースを使って情報を集めてまとめたりすることができていた。日本語の力も、2018 年末に行ったアセスメントの結果では、在籍学級での活動に支援を得て参加できるレベルにまで伸びていた。母語・継承語の力は、程度は異なるが母語話者とやりとりができ、その言語が話せることに対する自信や、学習意欲が観察された。また、ルーツのある国に関する自分が持っている知識への自信、それを日本語で表現することに対する自信がつくことで、2017 年度には不安を抱いていた「在籍学級でルーツのある国について話すこと」に対する気持ちの変化も見られた。本研究では実際の在籍学級でのやりとりまでは観察できなかったが、0 も J も在籍学級での「学び」につながる力が伸びていたことが明らかになった。

4. まとめと今後の課題

先行研究で連携による課題報告が多く見られる中、本研究でも実際に課題に直面したことで、その要因を探ることができた。また在籍学級での実践ができない中でも子どもたちには成長が見られた。子どもたちの知識や経験を活用して行った活動では、複数の言語や文化を扱うことができ、その中で説明、比較、まとめるなど認知力を育む取り組みも行われていた。先行研究では初期指導を終えたレベルの子どもへの支援や、母語・継承語の支援に関する課題が挙げられているが、本研究ではその支援方法の一例を示せたのではないだろうか。しかし子どもは日々成長している。今後は在籍学級での他の児童とのやりとりや、子どもの変化などの詳細な分析を行い、子どもの発達段階にあったよりよい支援のあり方を探求し続けたい。